

図119 遺構外出土縄文土器(1)

S=2/5



图120 遺構外出土繩文土器(2)

S=2/5



图121 遺構外出土繩文土器(3)

S=2/5

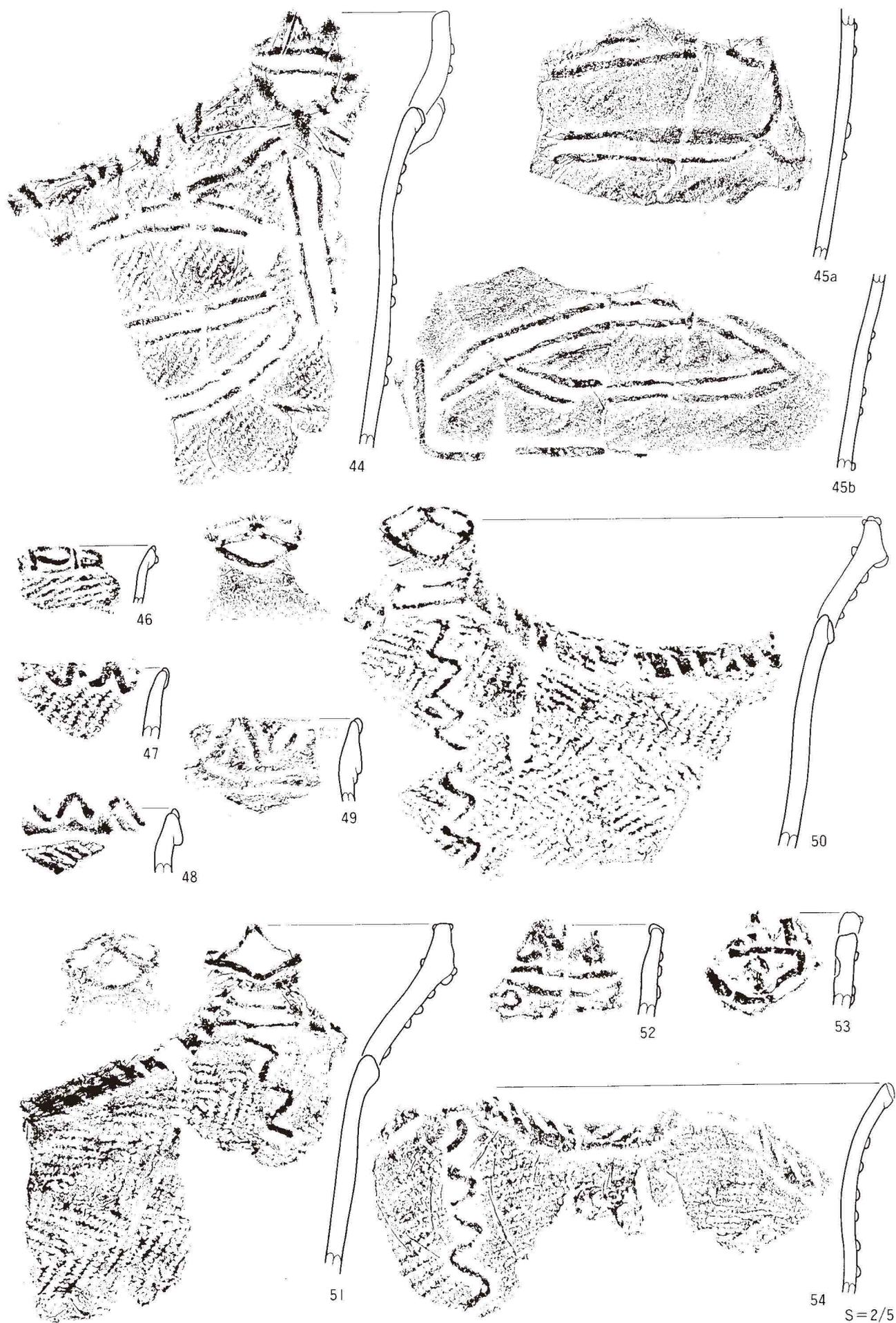


图122 遺構外出土縄文土器(4)

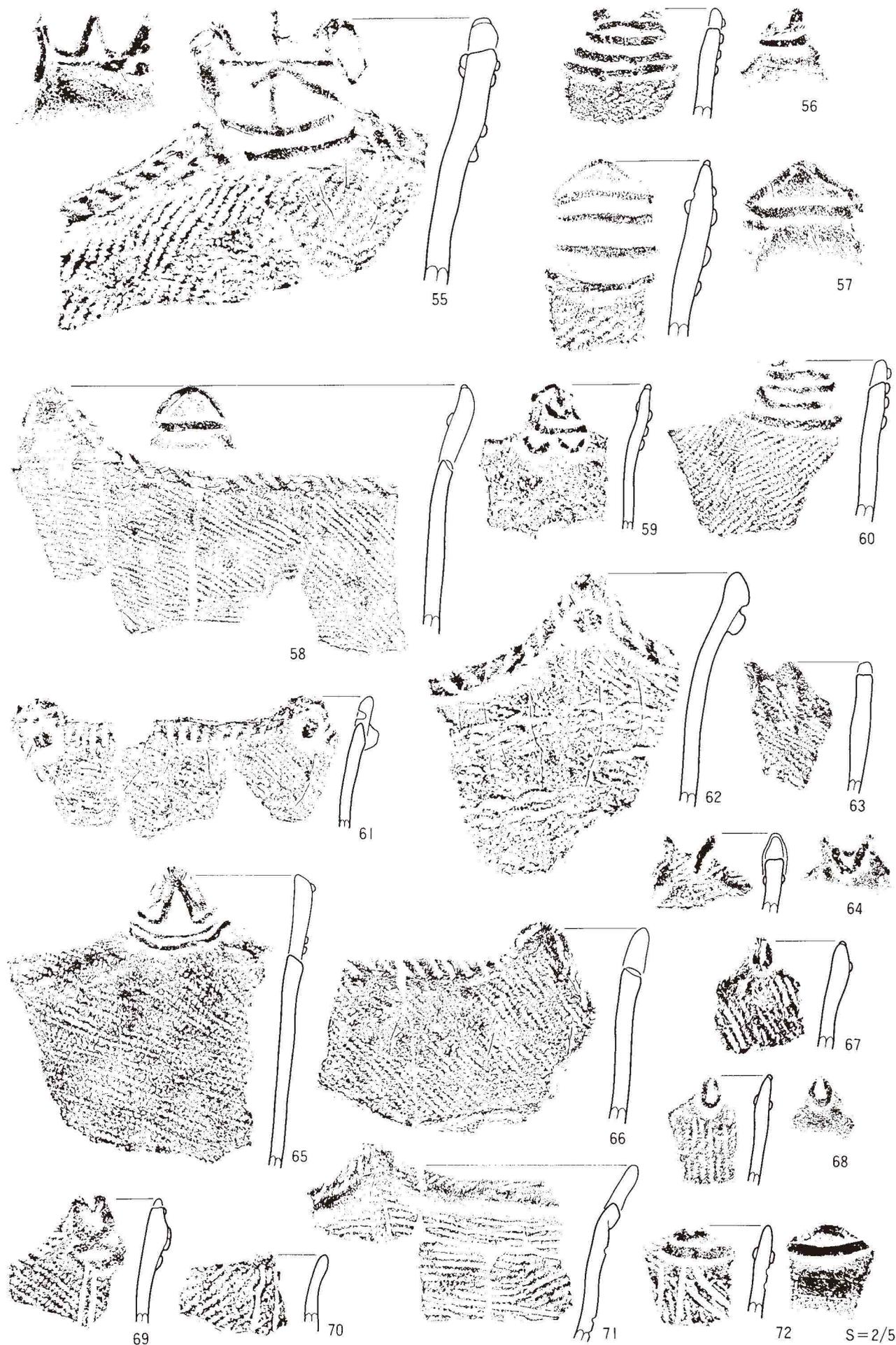
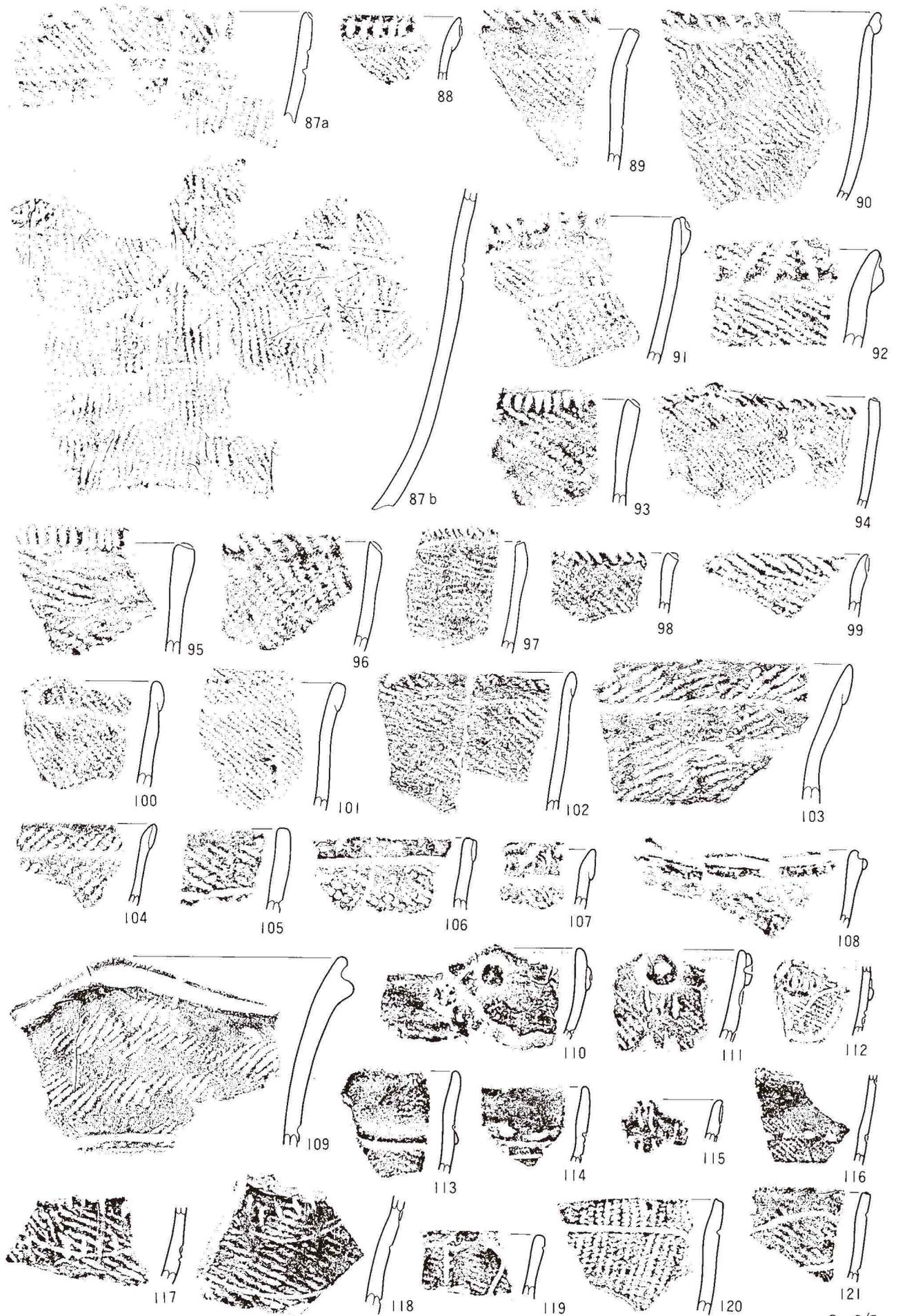


图123 遺構外出土縄文土器(5)



图124 遺構外出土繩文土器(6)

S=2/5



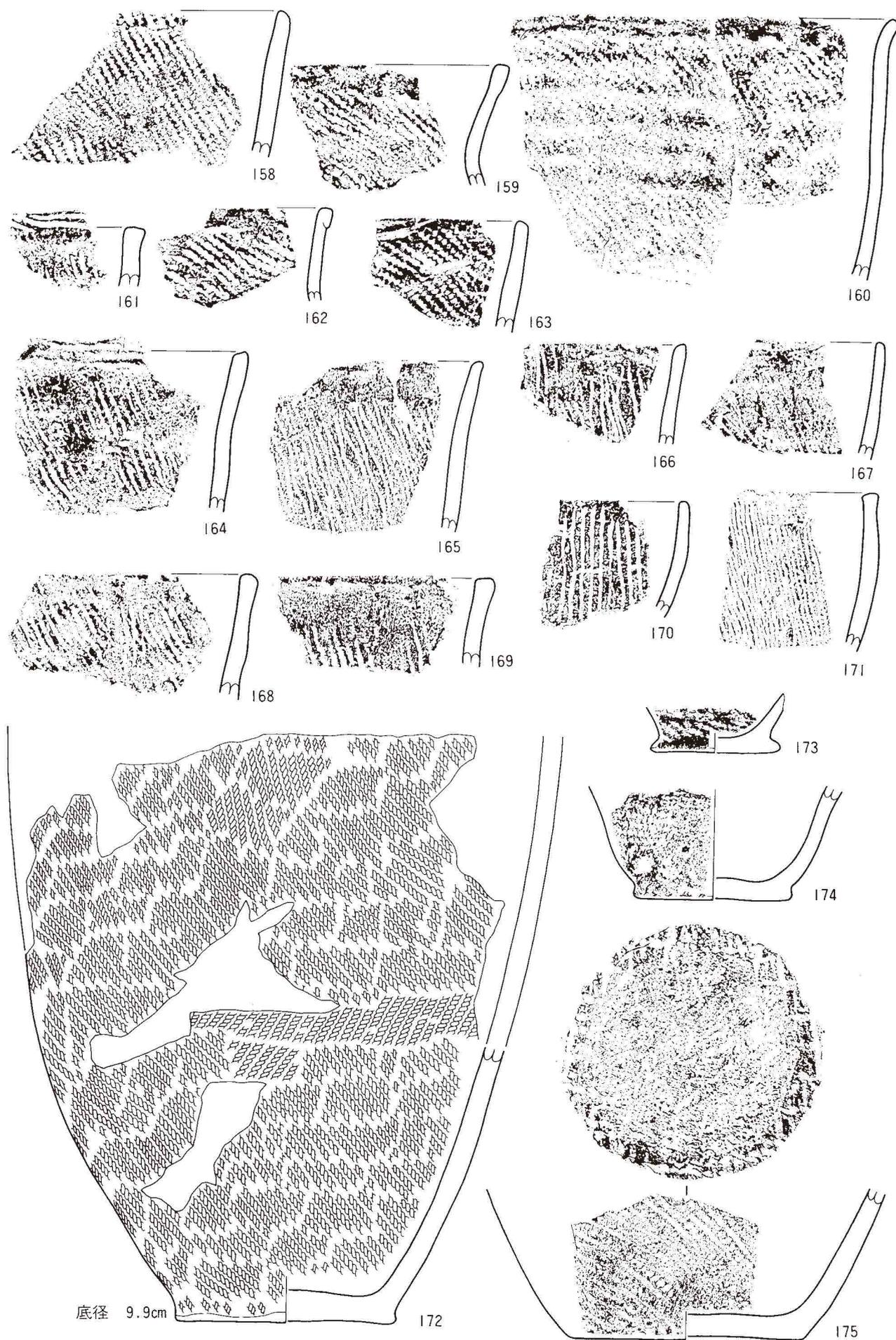
S=2/5

图125 遺構外出土縄文土器(7)



S=2/5

圖126 遺構外出土繩文土器(8)



底径 9.9cm

図127 遺構外出土縄文土器(9)

S=2/5

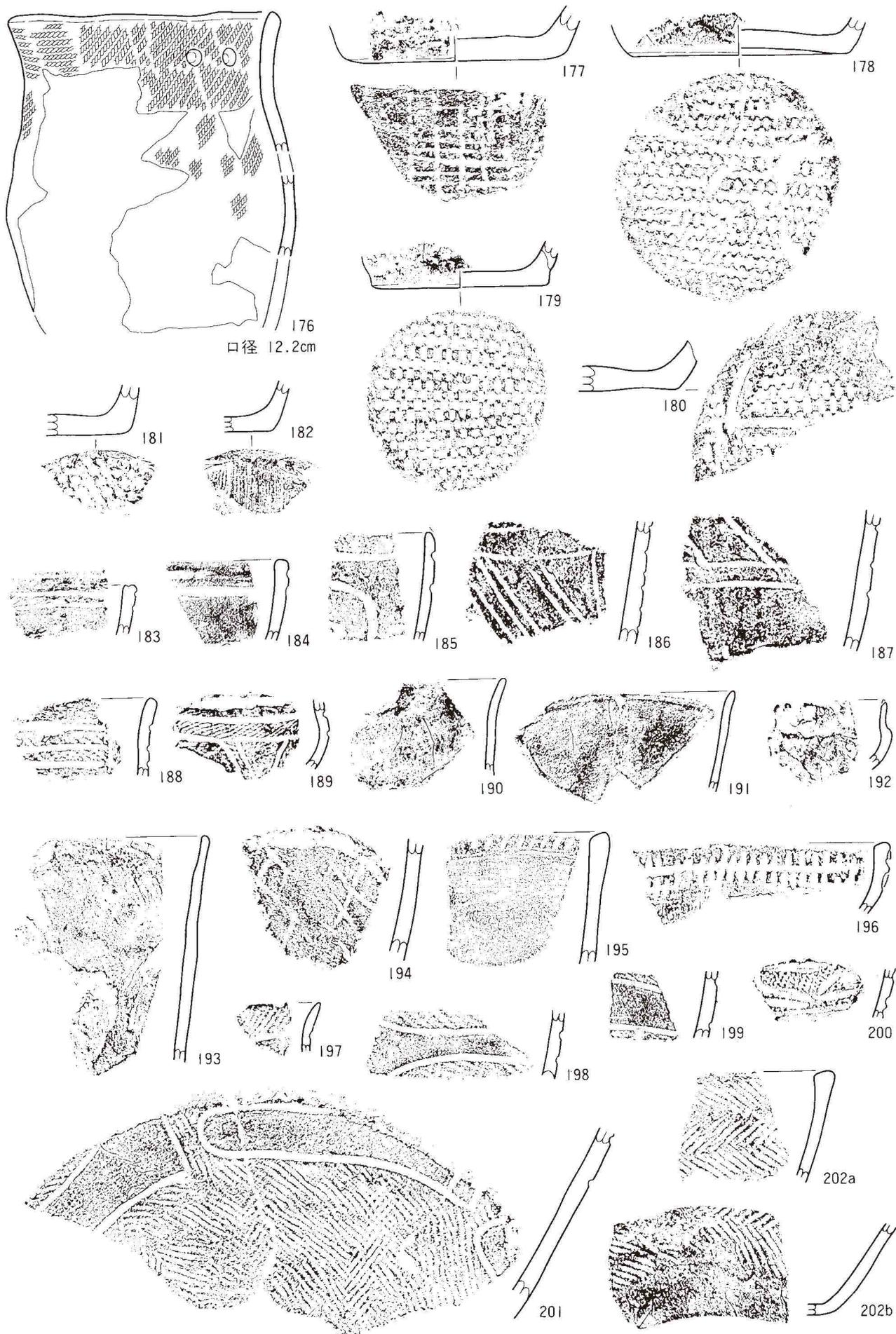


圖128 遺構外出土繩文土器(10)

S=2/5

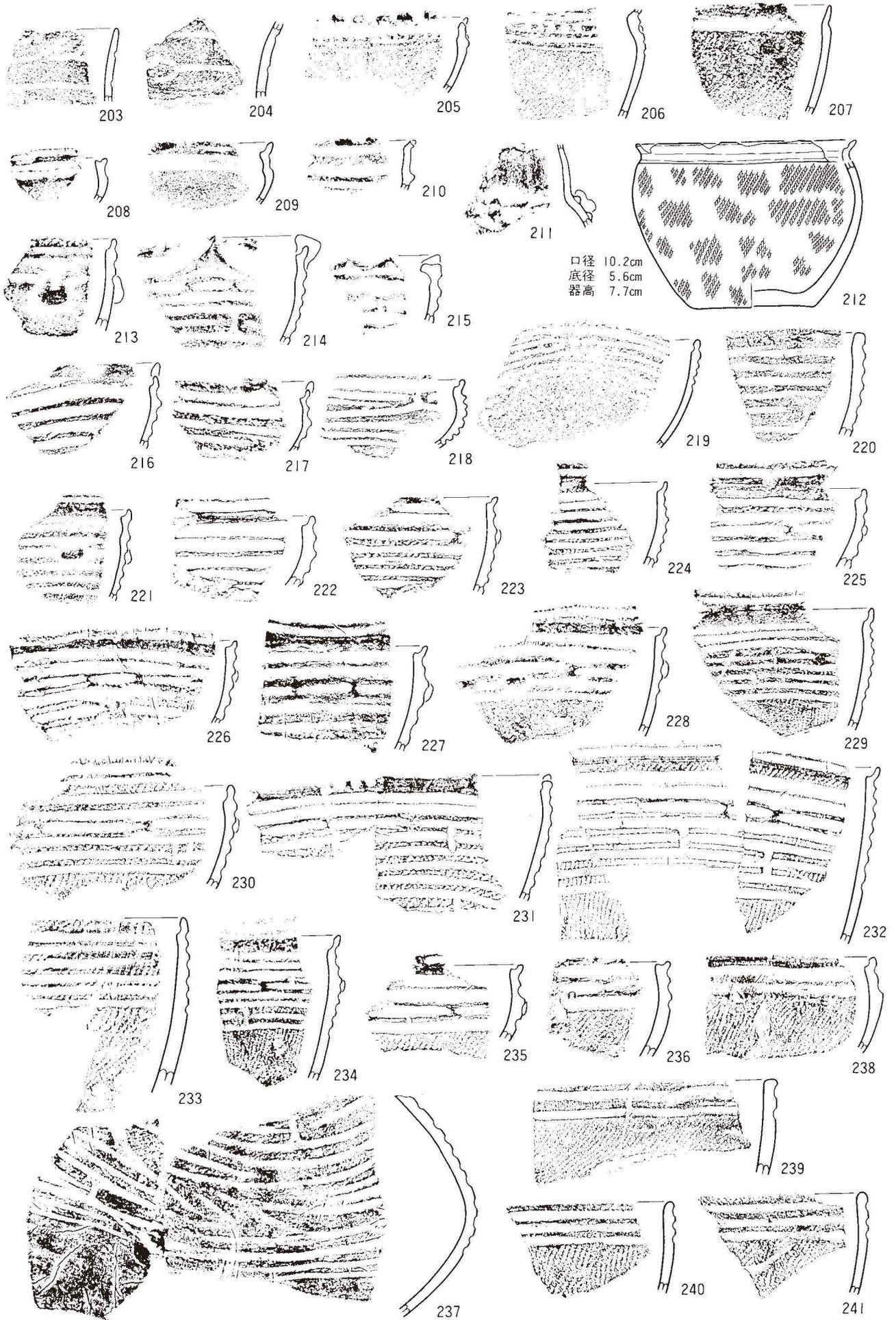


图129 遺構外出土縄文土器(1)

S=2/5

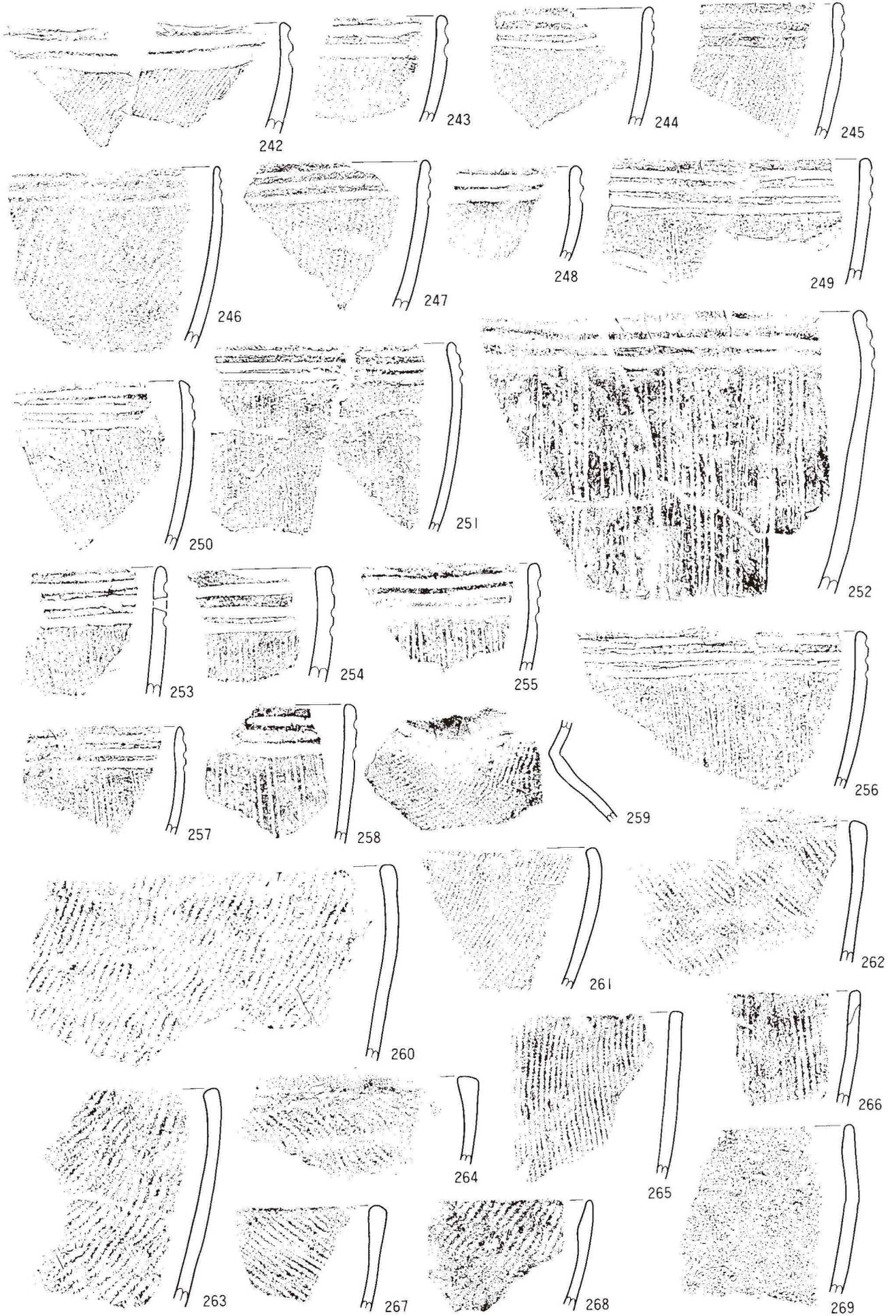


図130 遺構外出土縄文土器(12)

S=2/5

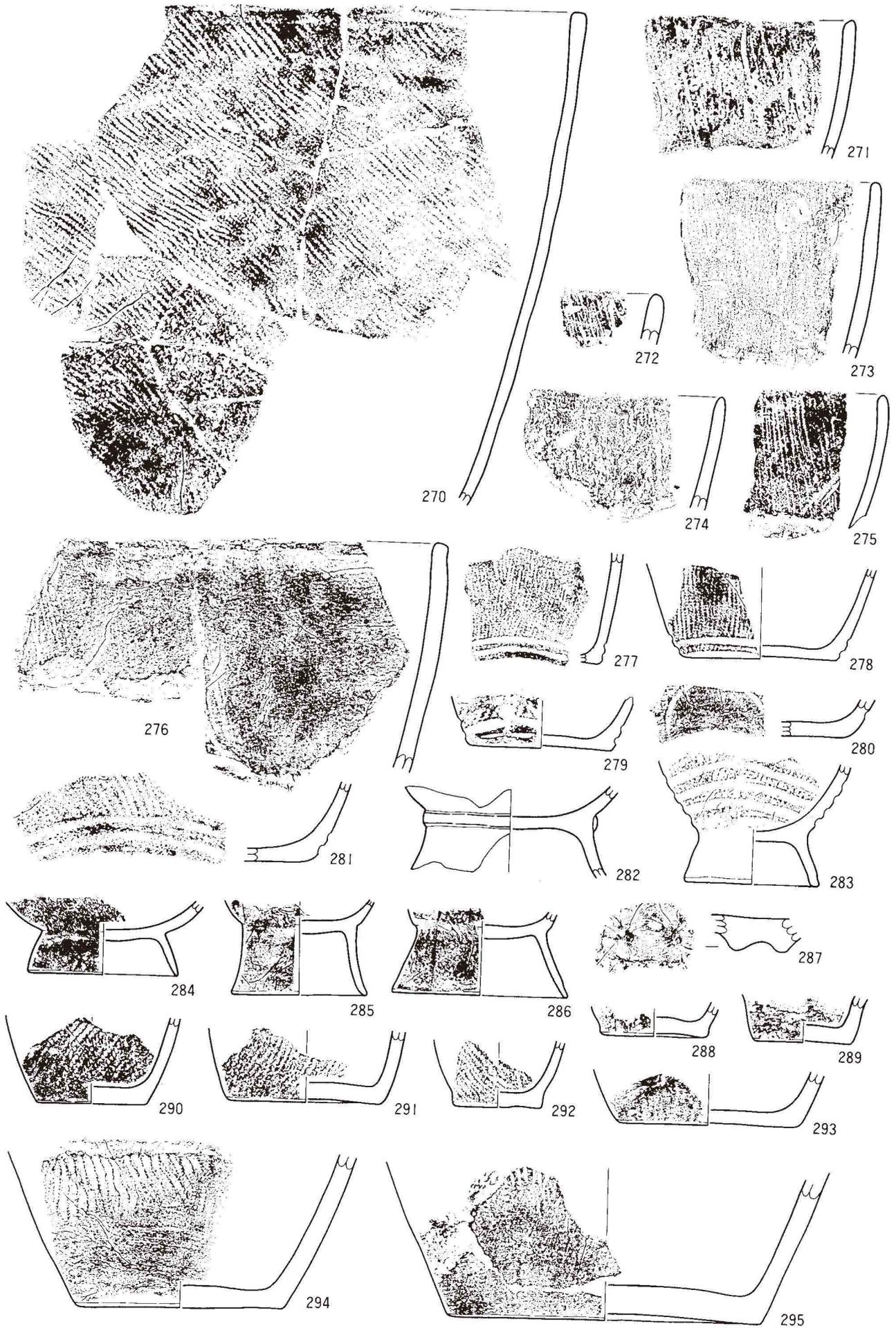


図131 遺構外出土縄文土器(13)

S=2/5

(2) 土製品 (図132、表65)

土偶1点、三角形土製品1点など、計4点出土した。1は板状土偶の腕部とみられ、表面に縄文が施文されている。三角形土製品は少し湾曲した造りで、表裏面とも良くナデられている。

表65 遺構外出土土製品計測表

図版番号	分類	出土区・層	大きさ (cm)	重さ (g)	文 様	備 考
132-1	板状土偶	K-29・Ⅲ	(2.0) × (2.9) × (0.9)	(5.0)	縄文 (RL?)	腕部・欠損品
132-2	三角形土製品	N-35・Ⅰ	3.3 × 3.6 × 1.0	10.0	無文	
132-3	-	表探	(3.4) × 1.2 × 1.1	(10.0)	沈線?	欠損品
132-4	-	I-29・Ⅲ	4.5 × 4.7 × 0.5	10.0	無文	

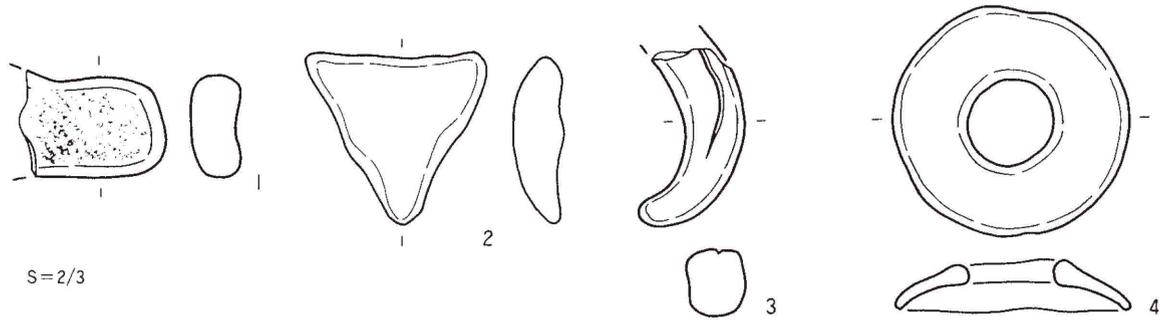


図132 遺構外出土土製品

(3) 石器 (図133～138、表66)

I～Ⅲ類石器及び剥片類などが、計181点出土した。

I-1類 磨製石斧 (1)

欠損品が1点出土した。刃部を欠いたもので、残りの基部にも剥離痕が著しい。

Ⅱ-1類 石鏃 (2～10)

完形品が4点、欠損品が5点出土した。形態は凸基(有柄)が大半で、ほかに平基が2点ある。平基の2は、五角形になっている。

Ⅱ-2類 石錐 (11・12)

完形品が1点、欠損品が1点出土した。11はやや大型で、調整剥離はほとんど錐部にだけ加えられている。12は、錐部が折損したものである。

Ⅱ-3類 石匙 (13～16)

完形品が3点、欠損品が1点出土した。13～15は縦長の剥片を素材とした縦形石匙であるが、15は剥片の打面側を刃部としている。16は横長の剥片を利用した横形石匙である。

Ⅱ-4類 石篋 (17)

欠損品が1点出土した。縦長の剥片を素材とし、背面側にはほぼ全面的に調整剥離を加えている。

Ⅱ-5類 非定形的な石器 (18・19)

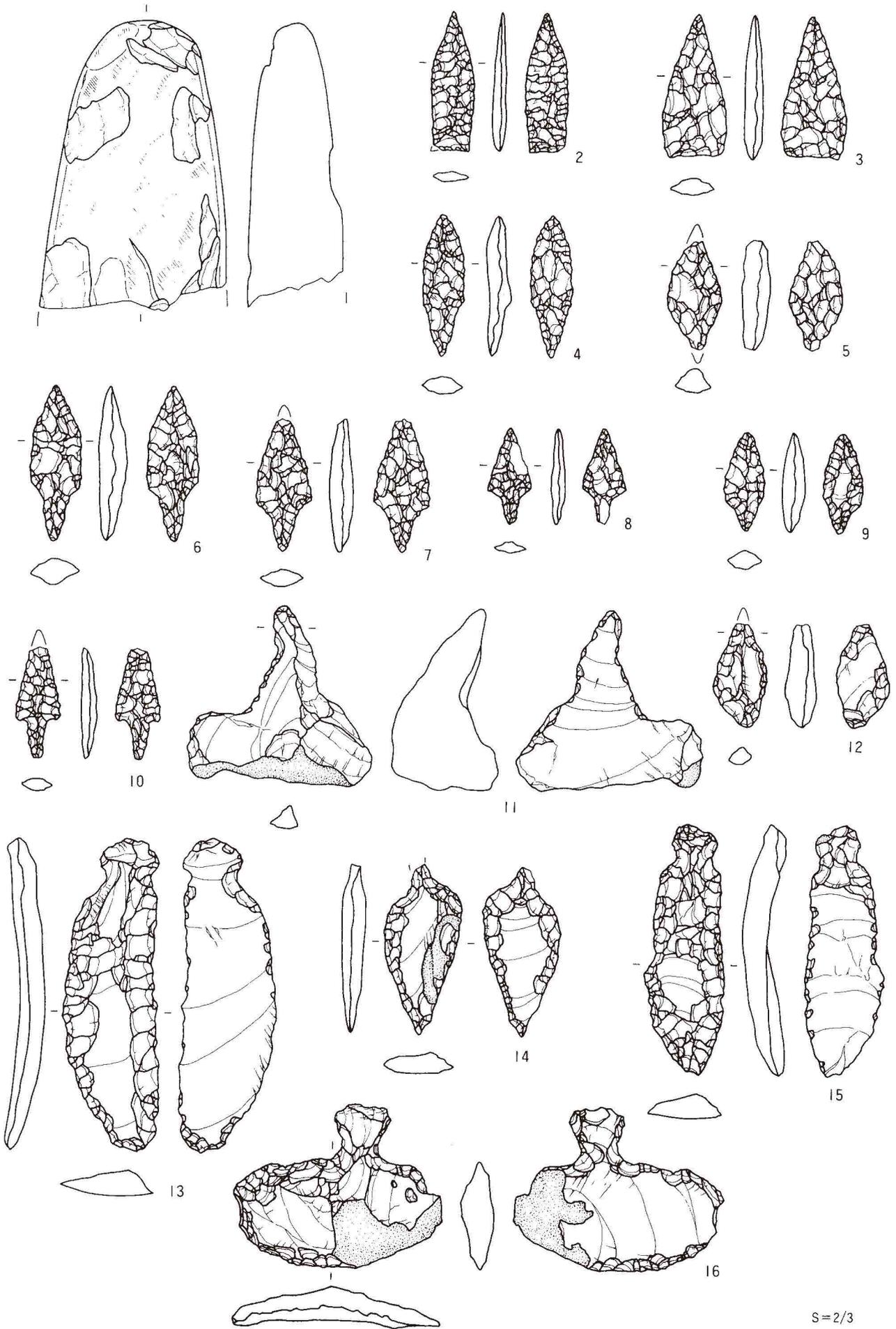
完形品が1点、欠損品が1点出土した。18は尖頭器状、19は篋状の形態になっている。

器種不明の欠損品 (20)

石槍の基部かと思われるものが、1点出土した。石槍としてはやや小型である。

Ⅱ-6類 Rフレイク・Uフレイクの類 (21～35)

Rフレイクが15点、Uフレイクが5点出土した。21～34はRフレイク、35はUフレイクである。



S=2/3

图133 遺構外出土石器(1)



图134 遺構外出土石器(2)

S=2/3

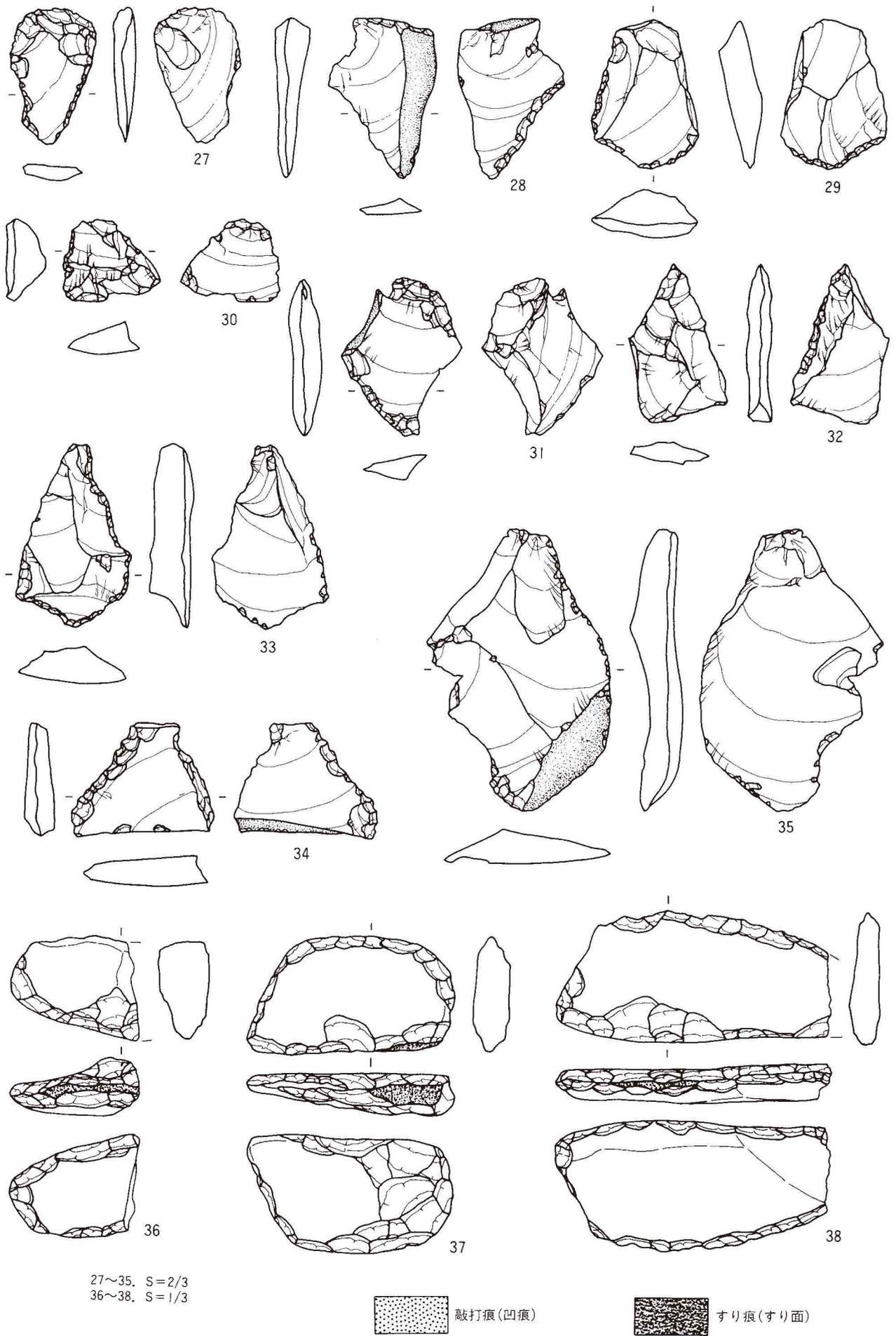


図135 遺構外出土石器(3)

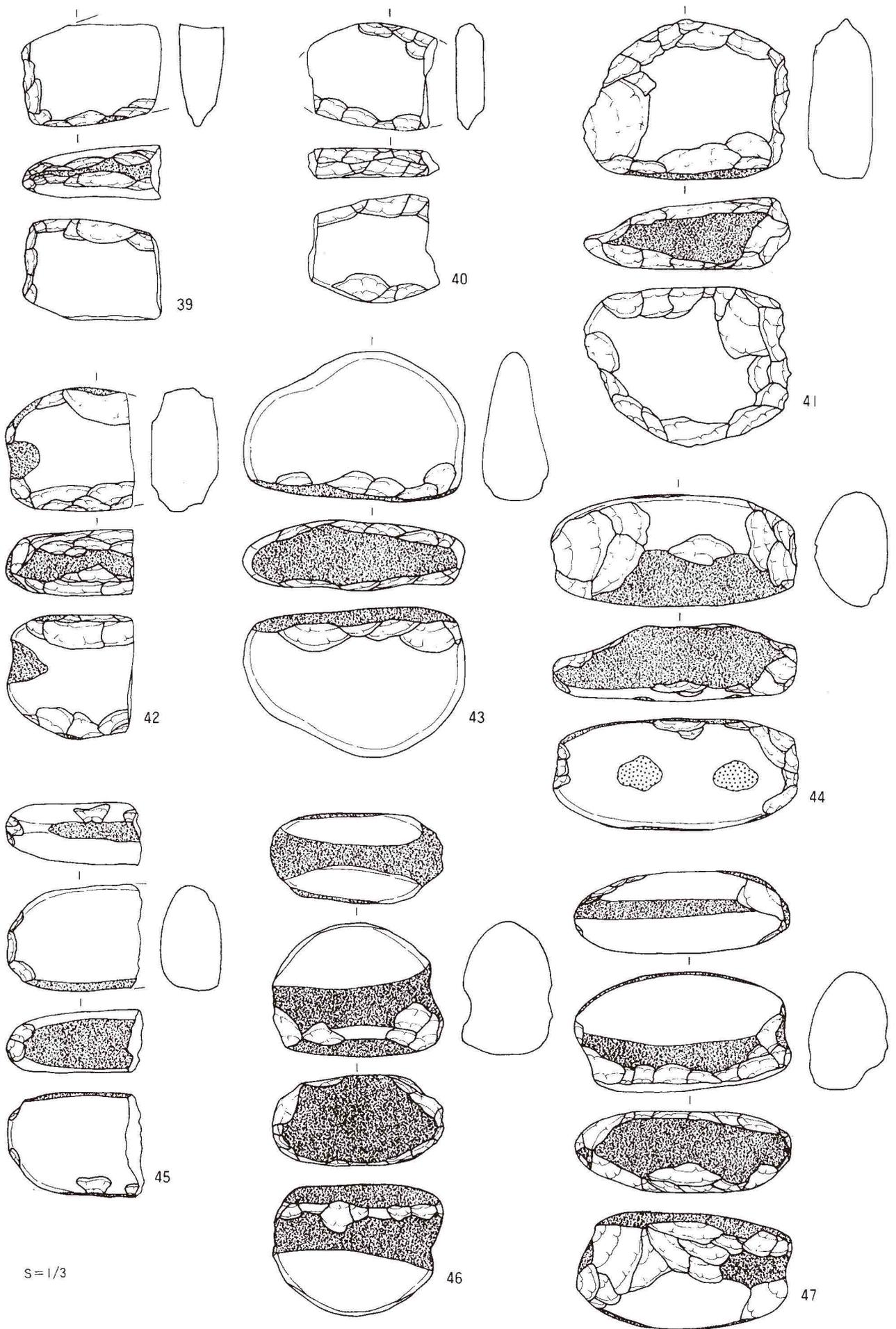
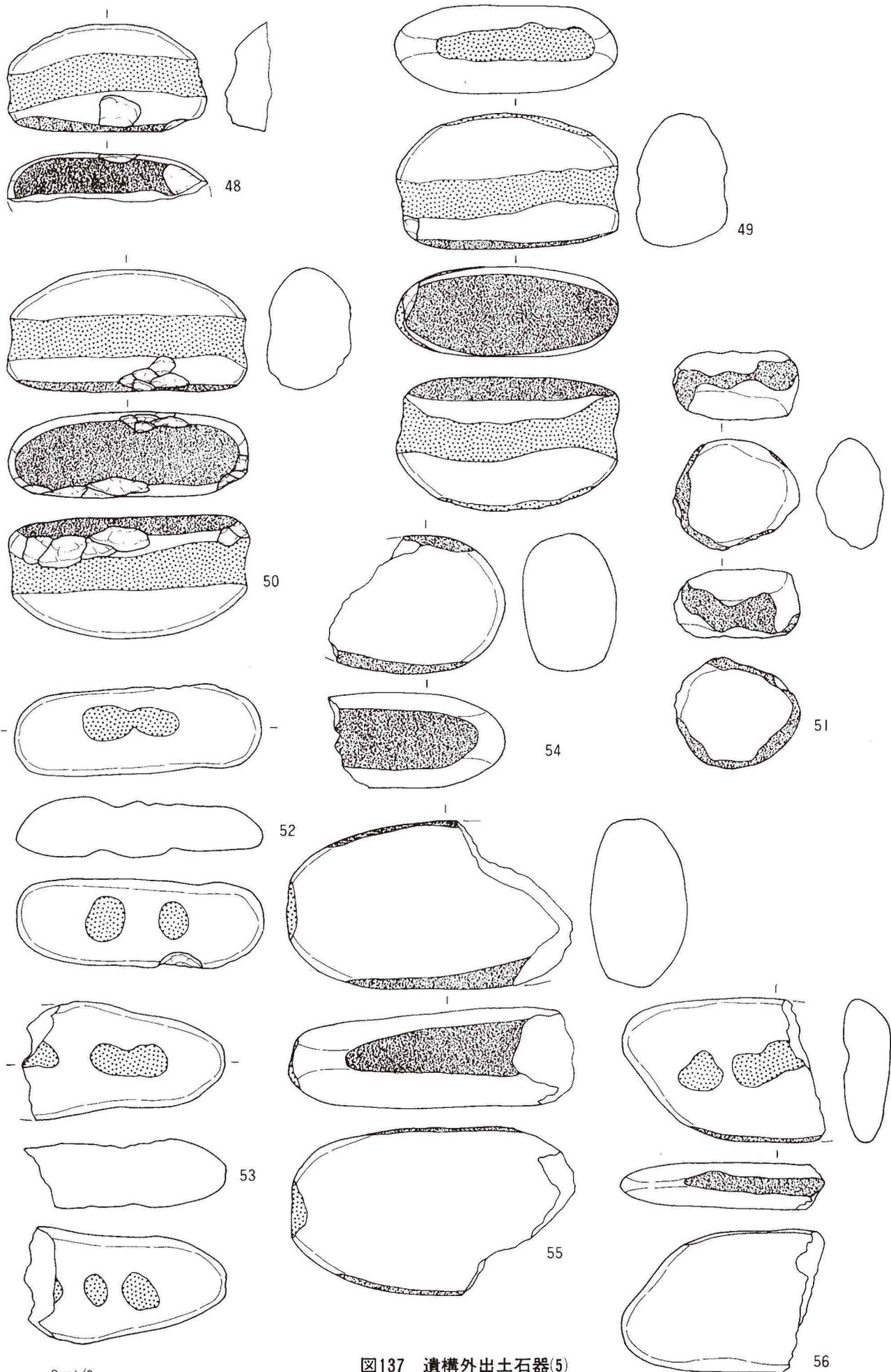


图136 遺構外出土石器(4)



S=1/3

図137 遺構外出土石器(5)

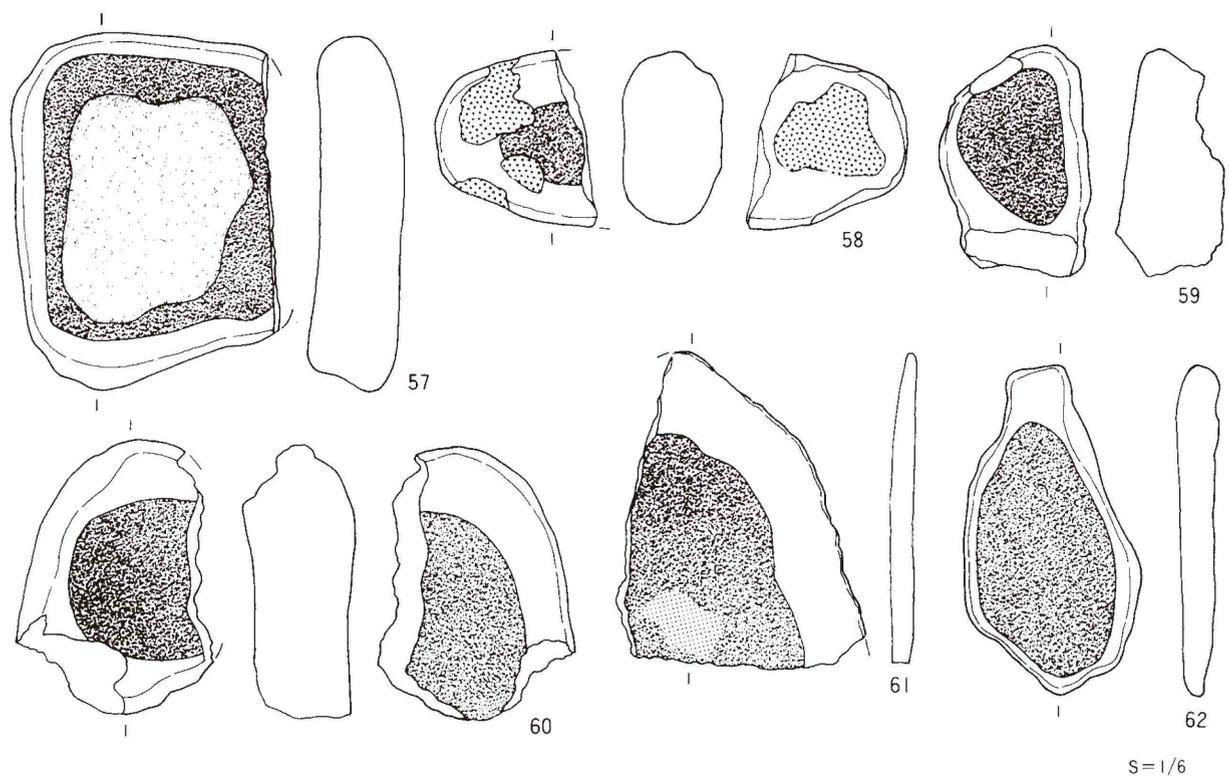


図138 遺構外出土石器(6)

剥片

チップも含めて、剥片は114点出土した。大半は珪質頁岩で、ほかに玉髓が2点、流紋岩が1点ある。

Ⅲ-1類 半円状扁平打製石器の類 (36~42)

完形品が2点、欠損品が5点出土した。36~40は半円状扁平打製石器で、周縁部には整形痕と思われる剥離痕が残っている。41・42にも同様の整形痕はみられるが、この2点は厚手ですり面の幅も狭くなっている。42の端部には、擦り込みによる抉りが付けられている。

Ⅲ-2類 石冠の類 (43~50)

石冠等、礫石器の中でも比較的定形的で、幅の広いすり面を特徴とするものを分類した。完形品が6点、欠損品が2点出土した。46~50は石冠と呼ばれる類で、幅の広い抉り込みが長軸方向をほぼ一周している。この抉り込んだ部分には、敲打痕やすり痕、及びその複合痕がみられる。43~45のすり面には石冠と同様の剥離痕が伴い、44の両端部には著しい剥離痕が残っている。

Ⅲ-3類 すり石・敲石・凹石の類 (51~56)

完形品が2点、欠損品が4点出土した。51・54・55にはすり痕、52・53には凹痕（敲打の集中痕）、56にはすり痕と凹痕がみられる。

Ⅲ-4類 石皿・台石の類 (57~62)

完形品が1点、欠損品が5点出土した。57・59~62は石皿で、57にはタール状の黒色異物（実測図中央のスクリーントーン部分）、61には赤色顔料と思われる赤色異物（実測図左下のスクリーントーン部分）が付着している。58にはすり痕のほか、敲打痕もかなり残っている。（工藤）

表66 遺構外出土石器計測表

図録番号	分類	出土区・層	大きさ(cm)	重さ(g)	石質	備	考
133-1	I-1・磨製石斧	M-28・I	(7.8)×5.2×2.6	(145.9)	緑色緑泥凝灰岩	剥離痕・欠損品	
133-2	II-1・石鏃	N-35・I	(3.8)×1.2×0.4	(1.7)	珪質頁岩	平基・基部欠損	
133-3	II-1・石鏃	N-35・I	3.9×1.8×0.5	2.7	珪質頁岩	平基・基部欠損	
133-4	II-1・石鏃	J-31・I	3.9×1.2×0.7	2.4	珪質頁岩	凸基	
133-5	II-1・石鏃	K-32・III	(3.0)×1.5×1.3	(3.1)	珪質頁岩	凸基・先端・基部欠損	
133-6	II-1・石鏃	J-31・I	4.2×1.4×0.8	3.6	珪質頁岩	凸基	
133-7	II-1・石鏃	J-32・I	(3.6)×1.6×0.6	(2.5)	珪質頁岩	凸基・先端欠損	
133-8	II-1・石鏃	N-35	(2.6)×1.2×0.4	(0.8)	珪質頁岩	凸基・先端・基部欠損	
133-9	II-1・石鏃	J-31・I	2.7×1.2×0.6	1.6	珪質頁岩	凸基	
133-10	II-1・石鏃	L-35・I	(3.0)×1.2×0.5	(1.2)	珪質頁岩	凸基・先端欠損	
133-11	II-2・石錐	I-28・IV	4.9×5.1×2.9	34.0	鉄石英	先端磨耗	
133-12	II-2・石錐	Q-32・I	(2.3)×1.5×0.8	(3.0)	珪質頁岩	先端欠損	
133-13	II-3・石匙	Q-20・I	8.5×2.6×1.1	18.7	珪質頁岩	縦形	
133-14	II-3・石匙	K-29・III	(4.6)×2.1×0.7	(4.8)	珪質頁岩	縦形・基部欠損	
133-15	II-3・石匙	P-18・I	6.8×2.2×1.2	11.3	珪質頁岩	縦形・基部欠損	
133-16	II-3・石匙	R-36・I	4.4×5.7×0.9	16.3	珪質頁岩	横形	
134-17	II-4・石籠	K-33・I	(4.9)×3.1×1.1	(22.3)	珪質頁岩	欠損品	
134-18	II-5	Q-26・I	3.1×2.3×0.8	5.6	珪質頁岩		
134-19	II-5	J-31・I	(3.2)×2.0×0.6	(2.3)	珪質頁岩	欠損品	
134-20	-	J-33・I	(4.5)×2.1×0.9	(8.7)	珪質頁岩	欠損品(石槍?)	
134-21	II-6・Rフレイク	H-27・I	7.8×5.3×2.0	57.6	珪質頁岩		
134-22	II-6・Rフレイク	P-21・I	8.4×5.4×1.1	23.8	珪質頁岩		
134-23	II-6・Rフレイク	J-33・I	5.5×3.1×0.9	19.4	珪質頁岩		
134-24	II-6・Rフレイク	N-35	7.8×4.4×1.5	44.4	珪質頁岩		
134-25	II-6・Rフレイク	K-30・I~III	3.5×4.4×1.3	12.8	珪質頁岩		
134-26	II-6・Rフレイク	N-27・III	5.0×4.7×1.3	21.5	珪質頁岩		
135-27	II-6・Rフレイク	I-33・I	3.7×2.3×0.6	3.8	珪質頁岩		
135-28	II-6・Rフレイク	J-31・I	4.3×2.9×1.0	6.7	珪質頁岩		
135-29	II-6・Rフレイク	表探	4.1×2.9×1.2	12.6	珪質頁岩		
135-30	II-6・Rフレイク	I-33・I	2.2×2.7×1.1	4.7	珪質頁岩		
135-31	II-6・Rフレイク	L-36・I	4.3×3.3×0.9	8.1	珪質頁岩		
135-32	II-6・Rフレイク	P-29・I	4.3×2.2×0.7	5.7	珪質頁岩		
135-33	II-6・Rフレイク	O-35・I	5.0×3.2×1.2	14.1	珪質頁岩		
135-34	II-6・Rフレイク	Q-35・I	3.1×3.9×0.8	9.7	珪質頁岩		
135-35	II-6・Rフレイク	M-28・I	7.8×5.2×2.6	145.9	珪質頁岩		
135-36	III-1・半円状扁平打製石器	I-32・I	(6.9)×5.1×3.1	(132.1)	安山岩	すり面・剥離痕・欠損品	
135-37	III-1・半円状扁平打製石器	K-32・III	11.1×6.4×2.3	204.0	安山岩	すり面・剥離痕	
135-38	III-1・半円状扁平打製石器	K-32・III	(14.8)×7.1×2.2	(285.6)	安山岩	すり面・剥離痕・欠損品	
136-39	III-1・半円状扁平打製石器	I-33・III	(7.4)×5.4×3.0	(195.6)	安山岩	すり面・剥離痕・欠損品	
136-40	III-1・半円状扁平打製石器	N-27・I	(7.0)×5.9×1.5	(112.8)	安山岩	すり面・剥離痕・欠損品	
136-41	III-1	P-33・I	11.2×8.0×3.9	489.1	安山岩	すり面・剥離痕	
136-42	III-1	J-33・I	(6.9)×6.7×3.6	(264.7)	安山岩	すり面・剥離痕・欠損品	
136-43	III-2	K-26・I~III	12.0×8.2×3.7	506.0	安山岩	すり面・剥離痕	
136-44	III-2	K-32・III	13.4×6.1×3.9	501.9	凝灰岩	すり面・剥離痕・敲打痕	
136-45	III-2	K-32・II	(7.3)×5.2×3.5	(254.0)	閃緑岩	すり面・剥離痕・欠損品	
136-46	III-2・石冠	O-26・III	9.3×7.2×4.9	537.9	閃緑岩	すり面・剥離痕	
136-47	III-2・石冠	O-26・II下	10.6×6.5×4.4	488.8	閃緑岩	すり面・剥離痕	
137-48	III-2・石冠	J-32・I	(10.9)×6.0×(2.3)	(217.1)	安山岩	すり面・剥離痕・敲打痕・欠損品	
137-49	III-2・石冠	Q-30・I	12.0×7.3×5.9	683.4	安山岩	すり面・剥離痕・敲打痕	
137-50	III-2・石冠	P-26・III	12.9×6.5×4.6	589.2	安山岩	すり面・剥離痕・敲打痕	
137-51	III-3・すり石	I-32・III	6.8×6.0×3.7	195.2	玉すい	すり痕	
137-52	III-3・凹石	N-33・I	13.3×4.8×3.5	254.3	頁岩	敲打痕(凹)	
137-53	III-3・凹石	J-31・I	(10.9)×6.3×3.7	(271.4)	凝灰岩	敲打痕(凹)・欠損品	
137-54	III-3・すり石	O-28・I	(9.9)×7.4×5.2	(392.2)	安山岩	すり面	
137-55	III-3・すり石	N-32・I	(15.4)×9.0×5.3	(1,098.6)	閃緑岩	すり面	
137-56	III-3・すり・凹石	N-34・I	(10.9)×7.7×2.6	(230.5)	凝灰岩	すり面・敲打痕・欠損品	
138-57	III-4・石皿	K-30・III	28.4×(21.4)×6.8	(76,000.0)	安山岩	すり痕・黒色異物付着	
138-58	III-4	J-27・III	(13.6)×11.8×7.8	(2,200.0)	安山岩	すり痕・敲打痕	
138-59	III-4・石皿	I-32・III	(18.3)×12.0×8.4	(2,300.0)	流紋岩	すり痕	
138-60	III-4・石皿	K-31・III	(21.8)×(15.6)×9.0	(3,800.0)	安山岩	すり痕	
138-61	III-4・石皿	I-29・I	(25.0)×(19.5)×18.0	(1,200.0)	安山岩	すり痕・赤色異物付着	
138-62	III-4・石皿	N-36・I	26.0×13.8×3.2	1,500.0	流紋岩	すり痕	

2 平安時代の遺物(図139・図140-1~16、表67)

土師器が3点、須恵器が約20点、土製品が1点出土した。ほとんどが小破片である。出土層位はすべて基本層序第I層からの出土である。調査区北側O-36グリッドに集中する。この場所は緩斜面で東側は旧沢に接し窪みができていた。遺物の機種は土師器は坏、須恵器は大甕である。その実年代はおおむね9世紀末~10世紀前半のものと考えられる。以下に器種別に述べる。

(1)土師器

坏 (図139-1~3)

すべてロクロ成形である。1は回転糸切り痕が残る。2、3は内面がハケメが若干残り再調整されている。

(2) 須恵器

大甕 (図140-1~16)

すべて大甕である。1~16は胴部片である。1と3、5と6はそれぞれ同一個体であった可能性が高いがはっきりしない。胎土の色調は14以外は橙、赤褐色が主体である。外面は浅い平行あるいは格子状のタタキ目、内面には当て具痕をもつものもある。また、10には自然釉が付着している。これらは五所川原前田目窯、持子沢系窯で焼かれた製品であると思われる。

(3) 土製品 (図139-4)

手捏で作られ、楕円形状を呈する。窯体を利用して作られたと思われ、器面にはスサの抜き取ったような痕跡が見られる。

(中村)

表67 平安時代の遺物観察表

図版番号	出土位・層	種別	器種	部位	口径(cm)	低径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	底面調整
139-1	O-36・I	土師器	杯	2分の1残存	(12.6)	(7.2)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
139-2	N-36・I	土師器	杯	口縁部	-	-	-	ロクロナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	
139-3	N-36・I	土師器	杯	口縁部	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	
139-4	N-36・I	土製品	不明	完形	5.9	4.1	1.4	手捏	手捏	
140-1	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-2	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目		
140-3	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-4	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	格子状タタキ目	当具痕	
140-5	O-36・I	須恵器	大甕	頸部	-	-	-	格子状タタキ目		
140-6	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	格子状タタキ目		
140-7	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目		
140-8	N-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-9	N-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-10	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-11	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-12	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-13	K-31・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	格子状タタキ目		
140-14	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目		
140-15	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目	当具痕	
140-16	O-36・I	須恵器	大甕	胴部	-	-	-	平行タタキ目		

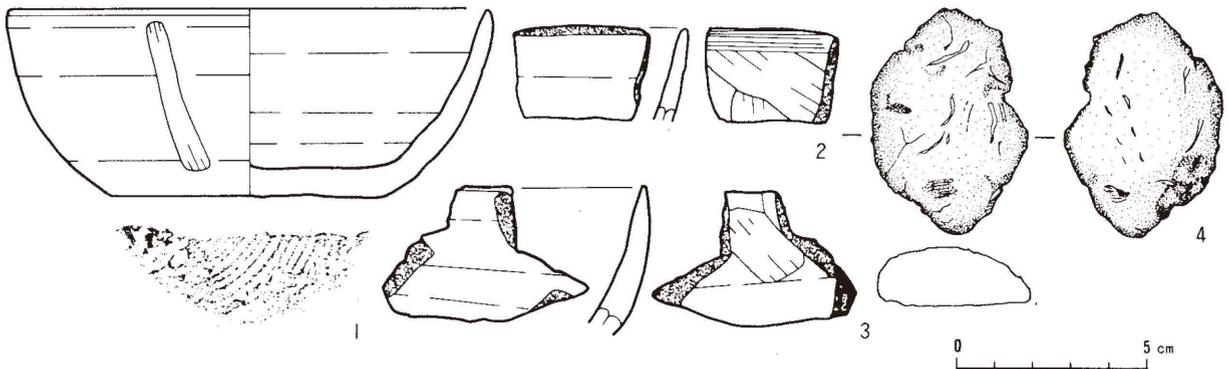


図139 平安時代の遺物(1)

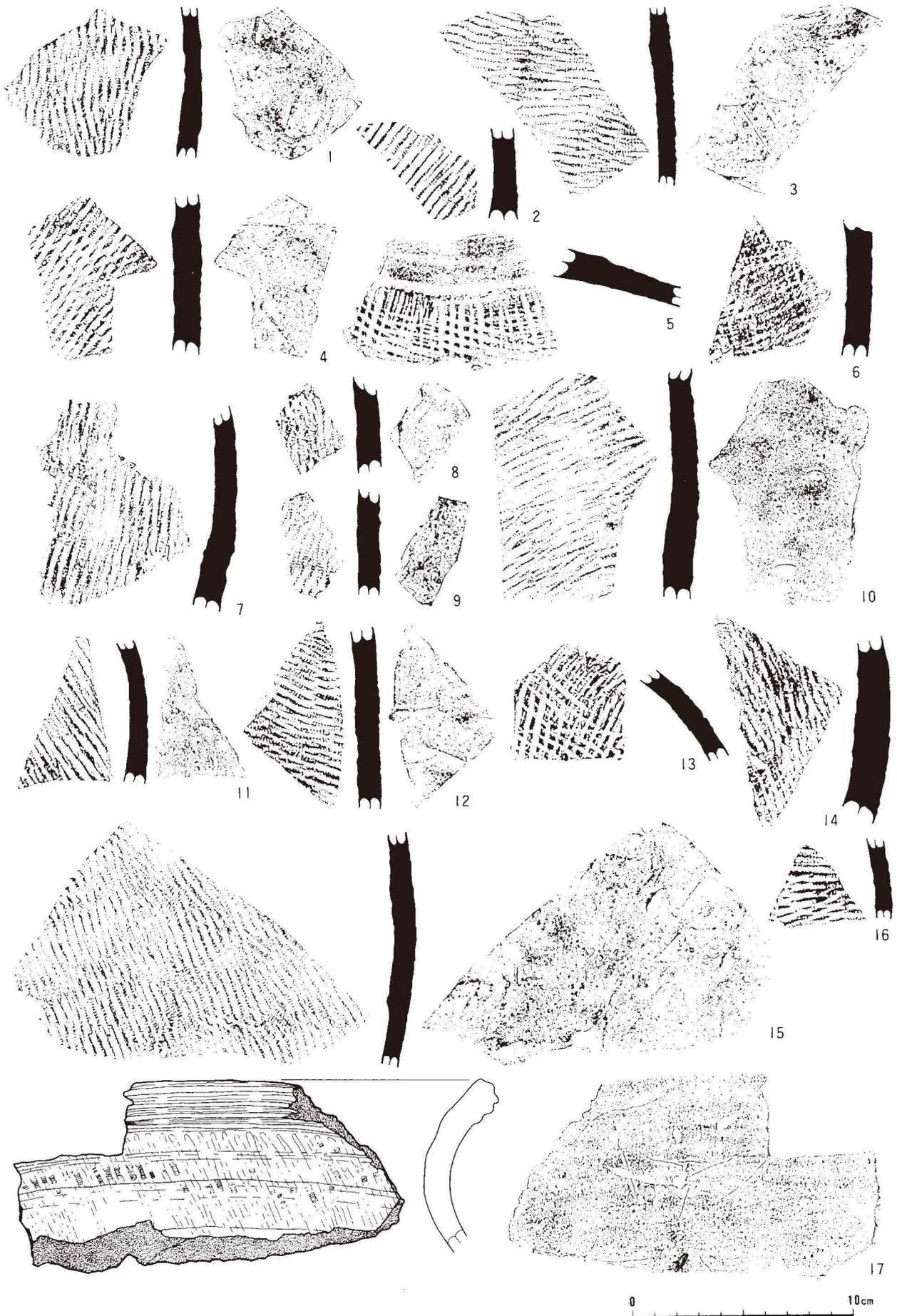


図140 平安時代の遺物(2)・中世以降の陶器

3 中・近世以降の遺物 (図140-17・図141、表68)

中世の陶器、近世以降の陶磁器類、鉄製品、土製品、銭貨が出土した。陶磁器類の焼成年代及び分類の基準、煙管、銭貨の分類は隈無(1)遺跡出土のものと同様に行った。以下に器種別に述べる。

(1)中世陶器 (図140-17)

大甕が1点出土した。器面は灰色の化粧土が塗られ、胎土は軟質で明黄褐色の陶器質である。整形は須恵器の技法である。器形は頸部が垂直に立ち上がり口縁部で外反する。口唇部外縁には沈線様の凹みをもち、その結果段を形成する。頸部はタタキ整形後、撫でつけられるが須恵器のように焼きしまった感がない。内縁にもナデがみられる。時期、系統ははっきりしないがタタキ整形痕が残存することから中世以降の遺物である可能性が高い。

(2)陶磁器類 (図141-1～14)

近世から現代までの碗、皿などの陶磁器類が約200点出土した。破片が多い。時期、系統は江戸時代後期の肥前系、明治時代の印判手が大半であるが、中には地方窯で焼かれたと思われるものも混在する。出土層位はすべてI層である。出土位置は調査区中央部のI～Q・25～30グリッドに集中する。

碗 (1～4)

1は小碗で高台をもち口唇部が端反りする呉器形を呈する。染付には人工コバルトを使用している。仏具としての利用された可能性もあろう。2は湯飲み碗、4はくらわんか手の飯碗であると思われるが詳細は不明である。3は人工コバルトの発色が鮮やかで平清水の可能性が高い。

瓶 (5～8)

5は小瓶で辣蕪形を呈すると推定される。高台はやや外反する撥高台である。内面には鉄釉が薄く着色されている。6は肩部で5同様に内面に鉄釉が施される。7は小瓶の頸部で肩衝形に近い形を呈すると思われる。8は外面に蛸唐草文が施文され、爛徳利の胴部である。

皿 (9～12)

9は中皿で丸形を呈すると推定される。見込みには草花文と蛸唐草文が描かれている。高台は蛇の目凹高台である。10、12は瀬戸美濃系の小皿、11は肥前系の大皿であろう。

蓋 (13)

銅版転写によって染付された合子の蓋である。明治20年以降のものと思われる。

甕 (14)

唐津で甕の胴部と思われる。

播鉢 (15～17)

肥前系のものであろう。15、16は唐津で卸目が細かいものである。

(3)鉄製品 (18～21)

18、19は棒状鉄製品である。調度品の部品のように思われるが詳細は不明である。20、21は煙管で2つとも雁首の部分である。銅製で、表面が緑青で覆われている。20は火皿が小さく明治時代以降のものである。21は火皿が欠損している。脂返しが直線的であることから18世紀後半のもののみられる。



図141 近世以降の遺物

(4)土製品 (25~27)

25は人形の脚部と思われる。土師質で側面部と底部にハケメと圧痕による指頭が認められる。22は硯の可能性も考えられるが詳細ははっきりしない。26、27は前後合わせによる型押しで作られている。泥面子である。26は人面、27はハケメが残り、梅鉢か星を表すとおもわれるがはっきりしない。すべて19世紀中頃のものと思われる。

(5)銭貨 (23、24)

寛永通宝が2枚と明治時代の銭貨2枚が出土した。寛永通宝はともに新寛永で23は波文が11波の四文銭、24は裏面に擦りによる加工がみられる模鑄銭である。 (中村)

表68 中世以降の遺物観察表

図版番号	出土位・層	種別	計測値(cm)			器種	製作地	年代	整形	胎土色
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)					
140-17	L-36・I	陶器	-	-	-	大甕	系統不明	中世か	ロクロナデ	浅黄褐色
141-1	K-32・I	磁器	(6.4)	(3.4)	4.4	染付碗	瀬戸美濃系 外面ヨコナデ、ヘラナデ、タタキ外面ヘラナデ	18C後半~19C中	ロクロ	白色
141-2	M-26・I	磁器	-	-	-	染付碗	瀬戸美濃系 外面一重網目文	18C後半~19C中	ロクロ	白色
141-3	Q-28・I	磁器	-	-	-	染付碗	平清水系か	17C末~18C後半	ロクロ	白色
141-4	M-27・I	磁器	-	-	-	染付碗	肥前系 外面二重網目文、内面一重網目文	17C末~18C後半	ロクロ	白色
141-5	M-35・I	磁器	-	(4.8)	(1.5)	染付瓶	肥前系 内面鉄粘着色	17C末~18C後半	ロクロ	白色
141-6	Q-28・I	磁器	-	-	-	染付瓶か	肥前系 内面鉄粘着色	17C末~18C後半	ロクロ	白色
141-7	Q-28・I	磁器	-	-	-	染付瓶	肥前系 頸部二重圈線	17C末~18C後半	ロクロ	白色
141-8	N-29・I K-32・I	磁器	-	-	-	染付瓶	肥前系 外面蛸唐草文、内面無釉	18C後半~19C中	ロクロ	白色
141-9	N-32・I	陶器	-	(9.4)	(1.6)	染付皿	肥前系 草花文、蛇の目凹高台	18C後半~19C中	ロクロ	白色
141-10	Q-21・I	磁器	-	-	-	染付皿	瀬戸美濃系 文様不明	18C後半~19C中	ロクロ	白色
141-11	M-35・I	磁器	-	-	-	染付皿	肥前系 裏付胎土?付着	17C末か	ロクロ	灰白色
141-12	M-30・I	陶器	-	-	-	染付皿	瀬戸美濃系	18C後半~19C中	ロクロ	白色
141-13	K-32・I	磁器	-	(6.4)	(1.4)	合子蓋	銅板印刷による鳳凰と虫	18C後半~19C中か	ロクロ	白色
141-14	M-34・I	陶器	-	-	-	壺	肥前系(唐津?)	18C後半~19C中か	タタキ	赤褐色
141-15	Q-32・I	陶器	-	-	-	播鉢	肥前系(唐津?)	18C後半~19C中か	ロクロ	褐色
141-16	L-30・I	陶器	-	-	-	播鉢	肥前系(唐津?)	18C後半~19C中か	ロクロ	褐色
141-17	L-29・I	陶器	-	-	-	播鉢	肥前系	18C後半~19C中か	ロクロ	褐色
141-22	O-30・I	土製品	(4.9)	3.4	0.9	硯?	内面擦痕、線条痕	19C中か	手捏?	褐色
141-25	O-28・I	土製品	(3.0)	2.4	3.4	人形の脚部か	手捏、ナデ、ハケメ	19C中か	手捏	浅黄褐色
141-26	K-32・I	土製品	1.9	1.6	0.7	泥面子	人面	19C中か	型押し	褐色
141-27	O-32・I	土製品	1.6	2.6	0.5	泥面子	梅鉢か五星?	19C中か	型押し	褐色
141-18	P-33・I	鉄製品	(5.1)	0.8	0.3	3.4	全面錆、棒状	不明	不明	不明
141-19	J-31・I	鉄製品	(7.6)	1.0	0.9	26.3	全面錆、棒状	不明	不明	不明
141-20	K-29・I	煙管	4.4	1.0	1.1	8.4	銅製、表面緑青	18C後半か		
141-21	M-27・I	煙管	4.1	1.0	1.0	7.8	火皿欠損、銅製、表面緑青	18C後半		
141-23	I-32・I	銭貨	2.3	-	1.0	3.8	四文銭、波文11波	1768~		
141-24	O-31・I	銭貨	-	-	0.1	1.0	裏面擦り加工、模鑄銭	不明		



遠景



基本土層



第1号住居跡



第1号住居跡炉



第2号住居跡



第3号住居跡



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第4・5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



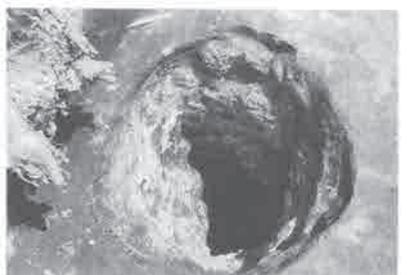
第10号土坑



第11号土坑



第12号土坑

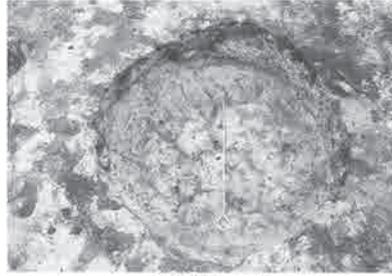


第13号土坑

写真1 限無(1)遺跡(1)



第14・15・21号土坑



第16号土坑



第17・18号土坑



第19号土坑



第22号土坑



第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



第28号土坑



第30号土坑



第31号土坑



第32号土坑



第33号土坑



第1号屋外炉



第1号埋設土器



第2号埋設土器

写真2 限無(1)遺跡(2)



作業風景



基本層序



第1号住居跡



第1号住居跡セクション



第1号住居跡カマド



第1号住居跡



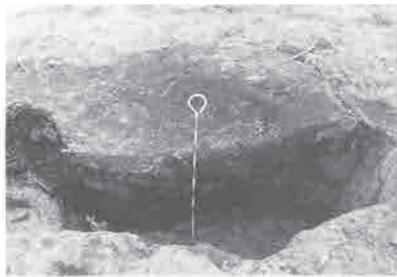
第1号住居跡カマド



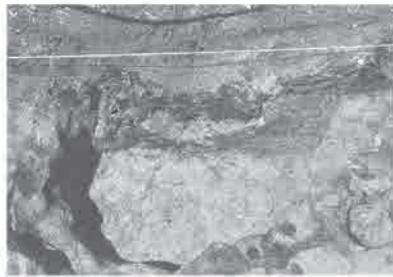
第1号土坑



第2号土坑



第2号土坑セクション



第3号土坑



第3号土坑セクション



第4号土坑



第1号火葬場跡



第1号火葬場跡



第1号火葬場跡



第1号火葬場跡

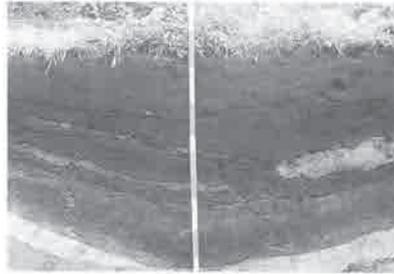


第1号火葬場跡

写真3 限無(2)遺跡



遠景



基本層序



第1号住居跡



第1号住居跡セクション



第1号住居跡炉



第1号住居跡炉



第1号住居跡炉



第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡炉



第2号住居跡



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑出土遺物



第3号土坑



第4号土坑



第4号土坑出土遺物



H-28グリッド出土土器



I-29グリッド出土土器

写真4 限無(6)遺跡

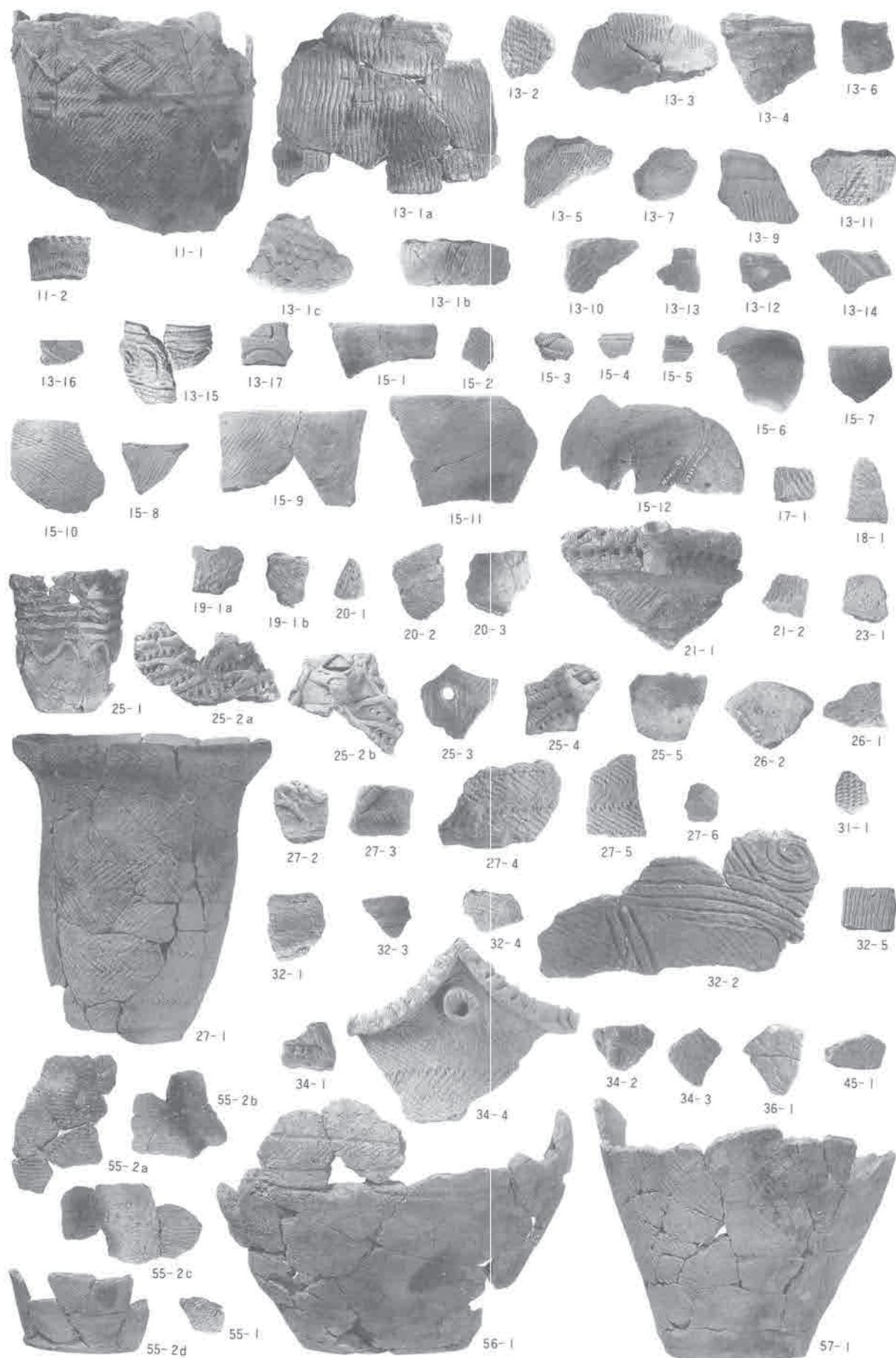


写真5 縄文土器 (1)

S=1/4



写真6 縄文土器 (2)



写真7 縄文土器 (3)

S=1/4



写真8 縄文土器 (4)

S=1/4



写真9 縄文土器 (5)

S=1/4



写真10 縄文土器 (6)



写真11 縄文土器 (7)

S=1/4

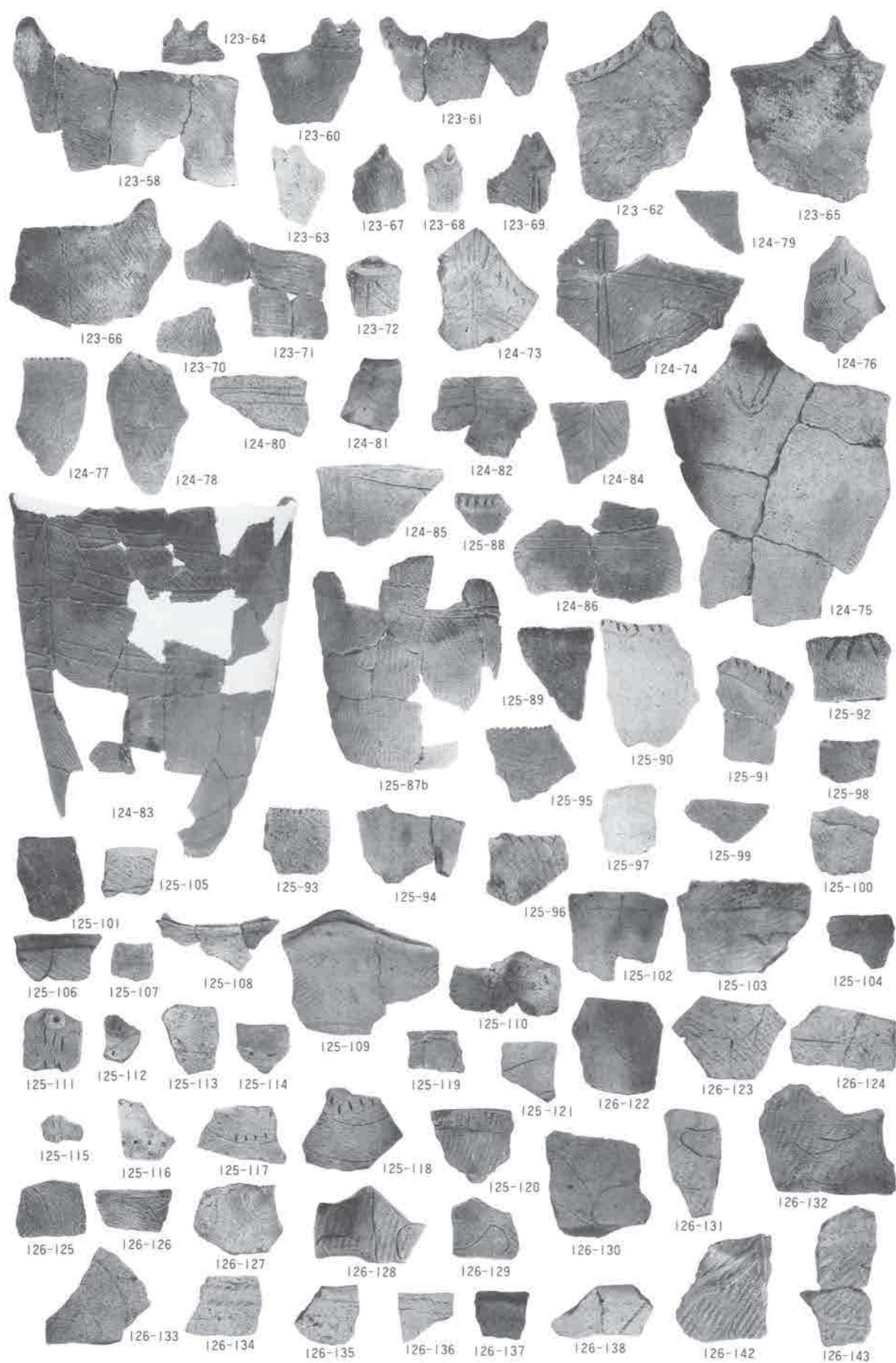


写真12 縄文土器 (8)

S=1/4

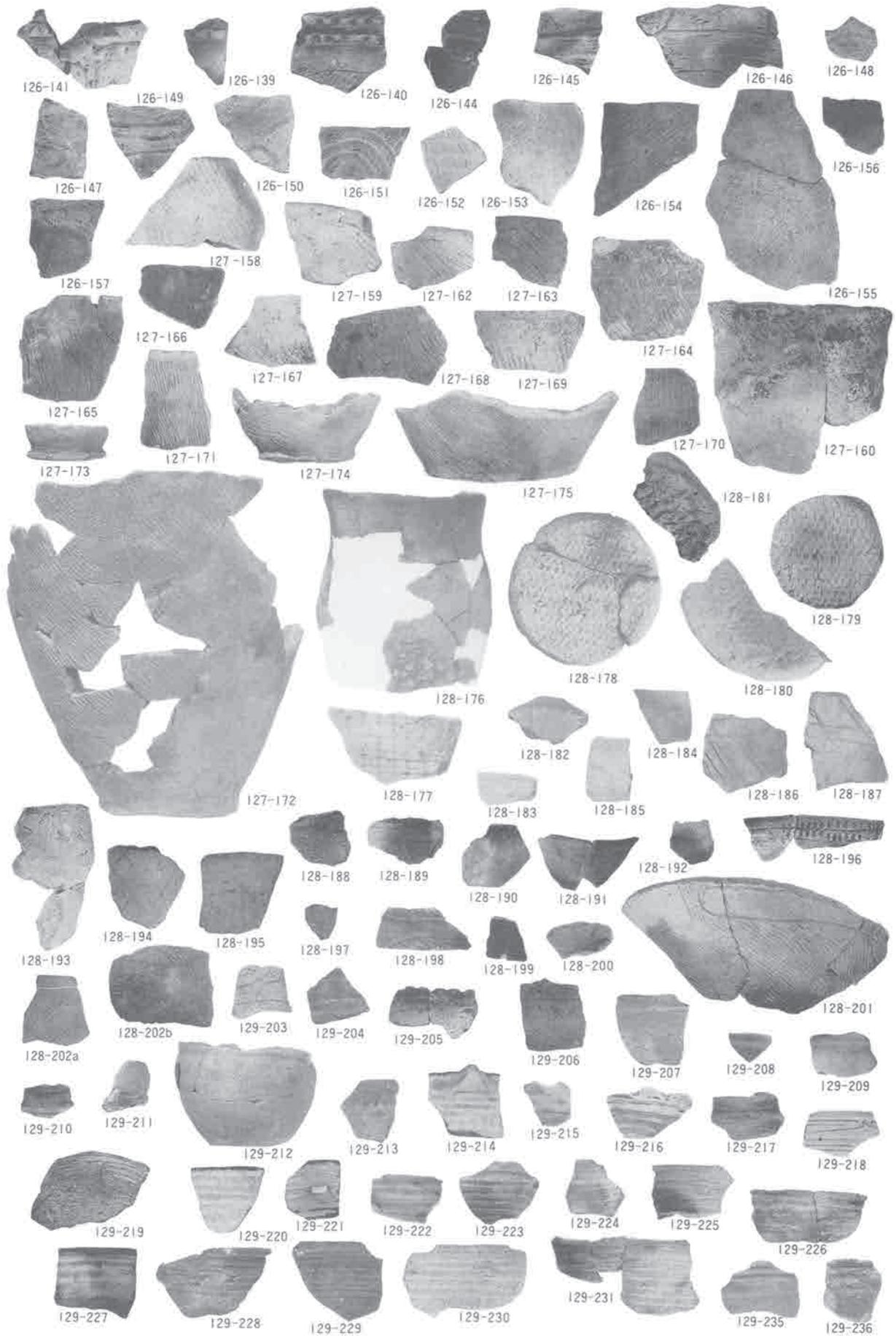


写真13 縄文土器 (9)

S=1/4

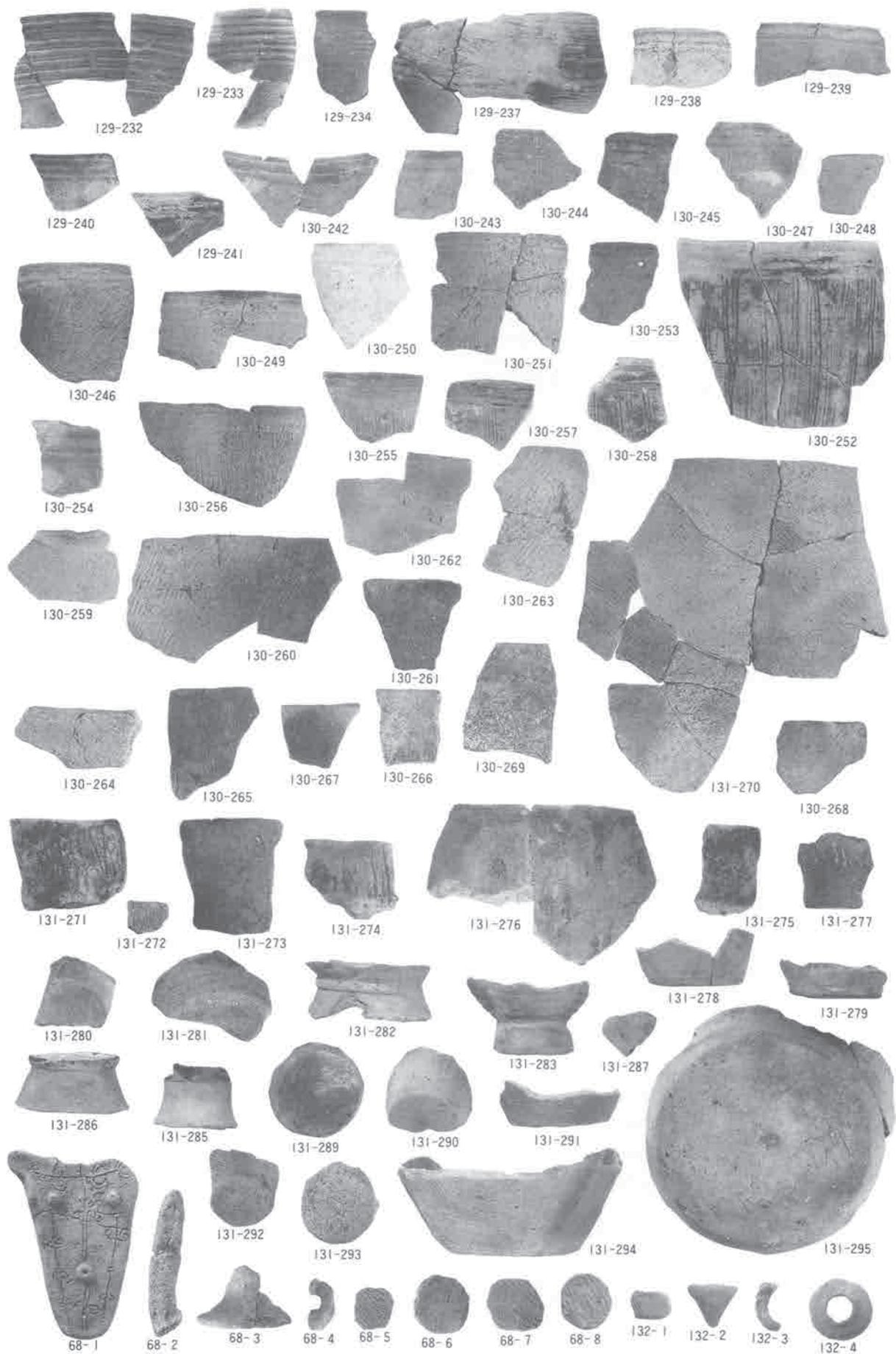


写真14 縄文土器 (10)・土製品

S=1/4

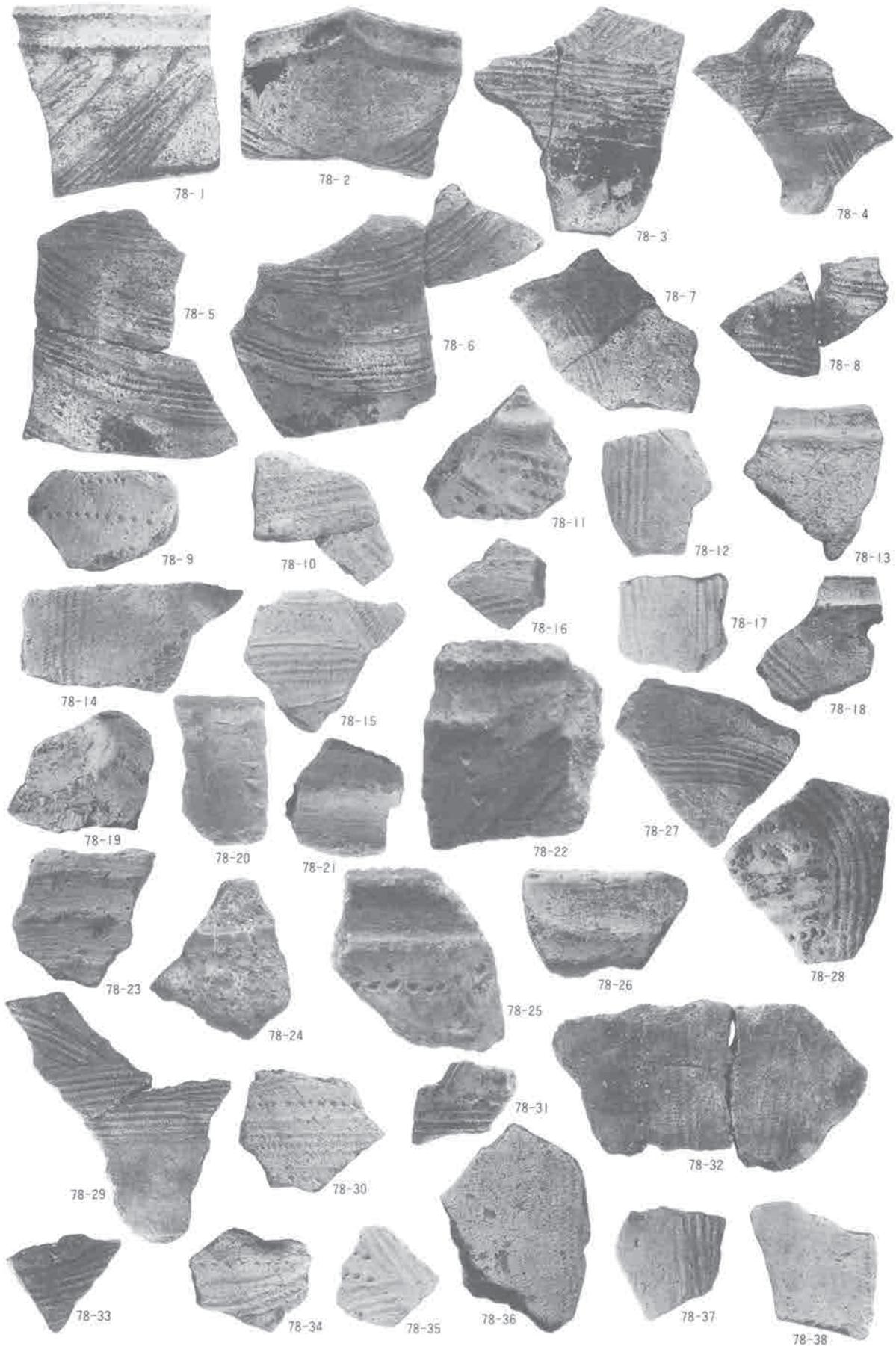


写真15 続縄文土器

11, 19~26はS=1/1 他はS=1/2

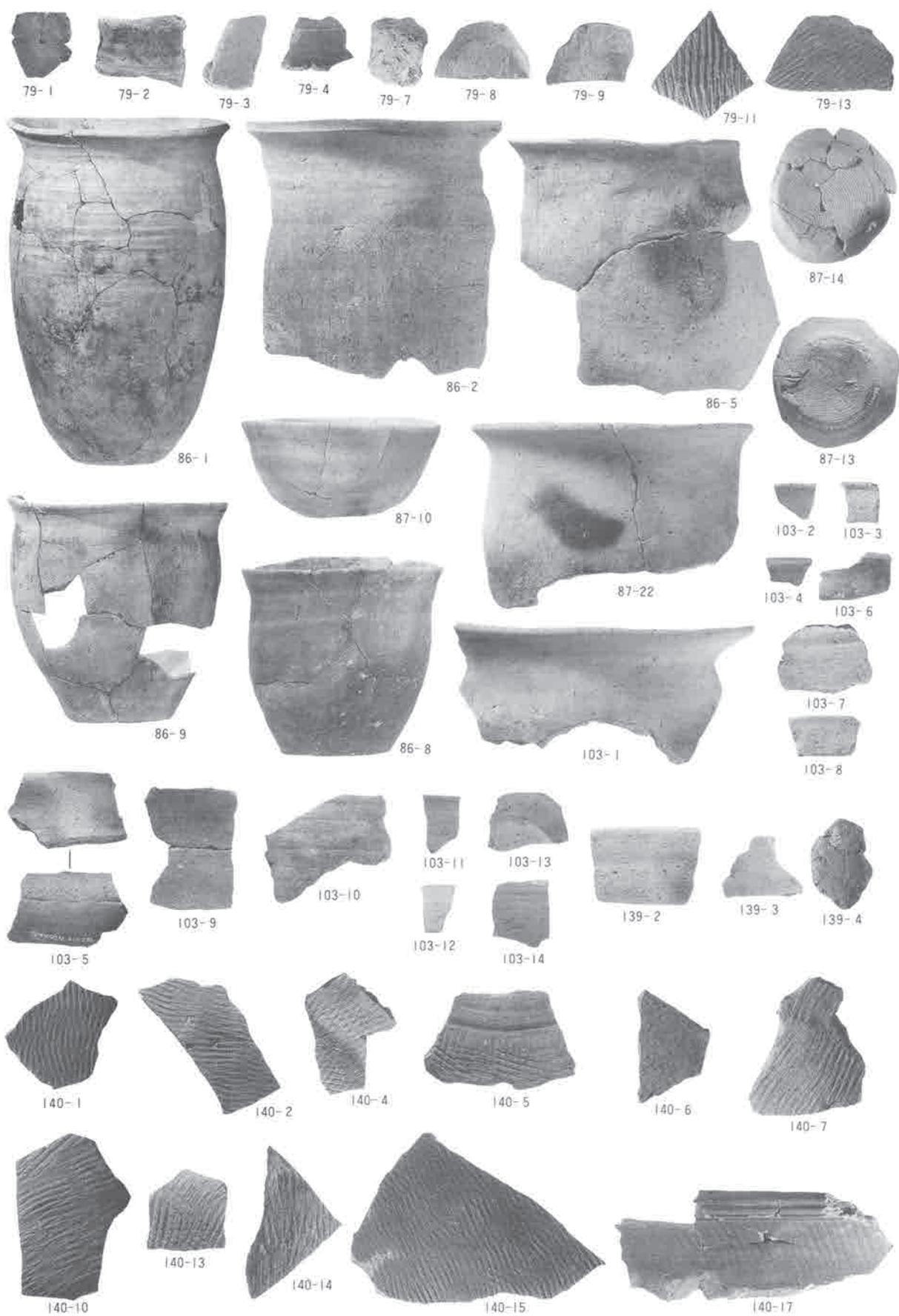


写真16 土師器・須恵器

86-1はS与1/6 39-2はS与1/2 その他はS与1/4

報告書抄録

ふりがな	くまなし(1)いせき くまなし(2)いせき くまなし(6)いせきはつくつちようさほうこくしょ								
書名	隈無(1)遺跡・隈無(2)遺跡・隈無(6)遺跡発掘調査報告書								
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第237集								
編著者名	工藤大・木村高・中村博文・坂本真弓								
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター								
所在地	〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL 0177(88)5701								
発行年月日	西暦1998年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 m ²	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
隈無(1)遺跡	あおもりけんごしよがわらし 青森県五所川原市 おおあざはのきさわあざくま 大字羽野木沢字隈 なし 無55	02205	05073	40° 45′ 11″	140° 31′ 57″	19960508 ～ 19961030	8,200	国道101号浪岡 五所川原道路建 設事業に伴う遺 跡発掘調査	
隈無(2)遺跡	あおもりけんごしよがわらし 青森県五所川原市 おおあざはのきさわあざくま 大字羽野木沢字隈 なし 無109	02205	05074	40° 45′ 21″	140° 31′ 45″	19950914 ～ 19960508 ～ 19961030	6,200		同上
隈無(6)遺跡	あおもりけんごしよがわらし 青森県五所川原市 おおあざもっこさわあざかくれがわ 大字持子沢字隠川 55-79	02205	05078	40° 45′ 7″	140° 31′ 59″	19960819 ～ 19961030	2,800		同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
隈無(1)遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡	3軒	縄文土器・石器	縄文時代中期他の最少 集落			
			屋外炉	1基	土製品・石製品				
			埋設土器	2基					
			土坑	35基					
	散布地	縄文時代他			後北式土器				
	散布地	続縄文時代			土師器・須恵器				
	散布地	平安時代			陶磁器・土製品				
	散布地	近世			鉄製品・銭貨				
					計ダンボール箱24箱				
隈無(2)遺跡	集落	縄文時代他	土坑	4基	縄文土器・石器	縄文時代中期の集落 縄文時代晩期の小規模 な捨て場			
			竪穴住居跡	1軒	土師器・須恵器				
	斎場	平安時代	火葬場跡	1基	陶磁器・土製品				
		近世	溝跡	1条	鉄製品・銭貨				
		時期不明			計ダンボール箱6箱				
隈無(6)遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡	2軒	縄文土器・石器	縄文時代中期の集落 縄文時代晩期の小規模 な捨て場			
			土坑	4基	土製品				
	散布地	平安時代			土師器・須恵器				
	散布地	近世			陶磁器・土製品				
					鉄製品・銭貨				
					計ダンボール箱29箱				

青森県埋蔵文化財調査報告書 第237集

隈無(1)遺跡・隈無(2)遺跡・隈無(6)遺跡

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 1998年3月31日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15
TEL 0177-88-5701
印刷所 株式会社 誠 工 社
〒030-0112 青森市大字八ツ役字上林78-42
TEL 0177-29-1611